記事ID:K20241128000000002500

紅型商品 どう開発し販売する？

沖縄女子学園で職業指導

糸満市の沖縄女子学園は18日、職業指導の一環で民間のノウハウを身につけるため、初めて外部から講師を招き製品企画から販売までを学ぶ授業を実施した。教育や地域創生、アートなど多岐にわたる事業を行う「一」社（京都市）の中馬一登CEO、デザイナーの櫻木章雄さんを迎え、在園生や職員が独創的な手法の一端に触れた。ワークショップを通じて製品をどう形にし世に出すか、「固定概念を解放する」という〝目からうろこ〟の過程を学んだ在園生ら。最後に飛び切りの楽しい商品を提案し、将来の夢への新たなアプローチや心の持ち方を体感した。

「一」社（京都市）が授業

在園生は普段の職業指導の授業で紅型制作や園芸に取り組む。今回は紅型制作の経験を生かして商品開発を学んだ。「こんな製品を作ろう」と始めから規定された受動的な手法でなく、在園生らの主体性ある能動的な思考・姿勢につなげようと今回の授業が実現した。今後の製品開発から販売に生かされていく。

「一」の中馬一登CEO（右）とデザイナーの櫻木章雄さん＝18日、糸満市の沖縄女子学園

在園生らがこれまでに制作した紅型の作品

自分しか作れない

企業活動を通して世界をよくするという理念を掲げる「一」社。県内ではこれまで南城市の沖縄刑務所と一緒に商品開発を行う。

中馬CEOは製品開発のポイントを説明しつつ「自分にしか作れないものを考える」大切さを提案した。在園生らはキーワードとして楽しいことや好きなもの、嫌いなものなどを表現していった。その上でアイデアが行き詰まった時にするという「キーワードしりとり」をした。商品からいったん離れた言葉と掛け合わせる連想から、新たな発見に至るという手法だ。ワークショップの中ではリモートや夜型など独自の働き方をする櫻木さんの話を聞き、自らの夢を語った在園生もいた。

授業から紅型は「洗えない」「小物しか作りにくい」などの概念をいったん横に置いた在園生ら。自らの好きなものやこだわりと、しりとりの掛け合わせから「古典柄の紅型を使ったクマのぬいぐるみ、骸骨の置物」「雨よけ用のヤールーのポンチョ」などが発表された。

さまざまな気づき

製品を世に出すことで「自分を誇らしく思う」「親が喜ぶ」「沖縄の経済を回す」など、さまざまな気づきを在園生らは感じた。最後は「アイデアを引き出す方法がめっちゃためになって吸収できたし、社会に出てもつなげられる経験になった」「将来雑貨などを売るお店を経営したいが、それが社会に貢献することに行き着いたらいい。そうなら、親も安心する」などと感想を話した。

高橋やちよ法務教官は「何をどんな思いで作るかという伝え方が今まで弱かった。ここを考えることでいい商品になるし、大事。在園生だけでなく先生たちも勉強になった」と語った。

中馬CEOは少年少女の更生・社会復帰を支える施設でのワークショップ開催は初だったという。「短い時間だったがとても可能性を感じた。社会に出て行った後の方が長い。施設にいる間にどれだけ支えられるか、大人の役割を感じさせられた」と語った。

12月14、15日に沖縄刑務所で開かれる沖縄矯正展で在園生らの作ってきた紅型作品が販売される。

（石井恭子）

無断複製・転載を禁じます